

---

特別寄稿

---

## 折々の時に思いを馳せて

大國 義一※

三十年間の長きにわたり、研究と教育にさらに大学運営に全力を投じられて此度定年を迎えられることを、心からお慶び申し上げます。この間、私は田口さん(親愛の情を込めて田口先生と言わずこう呼ばせてもらいます。)と殆んど全て行を共にしました。公的にも私的にも行動を共にする私達を「お神酒徳利」と言った人もいます。

大学も専攻分野も全然違う私達が肝胆相照らす仲となり得たのは、今から思えばお互い育った境遇が似通っていたこと、大学教育について描く理想像と価値観が同じであったことなどが考えられます。田口さんと大学の教育・研究さらに運営について話合った時間は、家族と過ごす時間よりはるかに長いものでした。私の思考の可成りの部分は田口さんから得たものですし、行動は田口さんのアドバイスが大きく寄与しています。

ところで昭和51年4月に本学に赴任された時の田口さんの第一印象は、青白く、眼光するどく、度のきつい眼鏡をかけ、スーツを几帳面に着こなし、足速やかに歩き、容易に人を近づけないといった雰囲気を持った人といった感じでした。田口さんが配属されたのは、家政学部一般教育の自然科学教室でした。田口さんが来られる5年前に私は同じ学部の一般教育社会科学教室に配属されていました。両教室の教員の事務を扱う事務室は同じであったので、田口さんとは毎日顔を合わすこととなりましたが、最初の2年間程は挨拶を交す程度でした。

私達はいずれも少人数の教室なので就任早々でもいくつか委員を受持つのが当り前のことでした。その一つ、教養課程委員は教室にとって重要な委員なのですが若手教員もやらされました。教養課程委員会は委員が十余名の小さな委員会ですが、一般教育についてはこの委員会が教授会に匹敵する機能と権限を持っていて委員の任務は重かった。一般教育課程の検討、一般教育科目の改廃、担当者の決定など、実質的にはこの委員会で審議され決定されていました。田口さんも早々にこの委員になりましたが、当初は余り発言をせず克明にメモをとってお

れました。しかし議長から意見を求められた時などは、的確に建設的な意見を述べられるのでこれは只者ではないと認識しました。

私達が勤め始めた頃の京都女子大学には若手教員はあまりいませんでした。さらに日常の業務は学科中心で動いていたので、少人数の私達の教室などは忘れられた存在でした。しかし本学に就職しこれから永く勤めるのだから少しでも大学を良くしたい。それには同じ志を持った仲間がほしいと私は常々思っていました。勤め始めて3年程経ち学内の事情も少し判ったので、学部・学科を越えて若手同志が気軽に自由に話し合える会を創りました。「昭和二桁会」と称したこの会は年に1～2度親睦会を開くだけの集まりでしたが、該当者の殆んどが参加されていていつも盛会でした。田口さんが就職された時もこの仲間での歓迎会を催しました。この集まりは十数年続き自然消滅しましたが、この時に得た知遇は得難く、私が定年退職するまで、大学運営などにかかわる種々な場面で協力していただきました。

田口さんが勤め始めて3年目だったと思います。田口さんは請われて大学組合の書記次長に選出されました。私も就職と同時に大学組合の執行委員に、翌年には副委員長にさらにその後引続いて執行委員に選出されていましたので、田口さんの相談相手を務めることとなりました。当時組合は多くの問題を抱えていました。年間の総所得を他大学並に引上げること、経歴減算制度を廃止させること、実験助手の地位を確立することなどでした。

当初は組合三役就任を固辞していた田口さんですが、一旦引受けるとその行動は素早く精力的でした。データーを集めそれを自分なりに分析しては、次々と疑問点を私に質問して来られました。私が中途半端な答えしか出せない時は私の宿題となりました。書記長が任期途中で辞められたので田口さんが書記長を務めました。自分が納得がいくまで案を検討し、団交まえには詳細なレジメをつくり大学理事会との交渉に臨むその態度に私は甚く感服しました。

この時以来田口さんとは親密になり、大学運営や組合の問題はもとより、私事についても話合うようになりま

---

※本学名誉教授

した。この30年間に大学では次々に大きな問題が生起しました。学長公選制度の確立。社会科学教室で起った悲しい松下事件。学長および教学関係の部長と理事会が対立して3部長が辞任され、混乱した大学を建て直すために設置された大学正常化委員会の問題。教養課程委員会を足がかりにして一般教育の大綱化に取り組んだ事。教授会自治の危機に直面して立上った教員の集りの教員会議の活動。それらの問題の全てに田口さんと共に取り組みました。その取り組みの詳細について書きたいことは沢山ありますが紙面が限られており割愛させていただきます。唯言えることは、田口さんは物事をじっくり見極めて、冷静に判断を下し緻密に計画を練られたということです。いずれの問題の解決にも田口さんが大きな役割を

果たしたことは云うまでもありません。

最後に一つだけつけ加えたいと思います。田口さんと私は大学の一般教育について、さらに大学教育全体についてその在り方を終始探り続けました。一般教育学会(後に大学教育学会と改称)の活動に参加し、将来本学でも取り上げることが必要と思える問題を先どりして提起してきました。大学教育の大綱化の一つである総合教育の導入。大学の自己点検評価の必要性、FD活動についてなどの問題提起です。それらの一部は既に実現していますが、必ずしも望ましい方向に進んでいると言い難いものもあります。しかし田口さんの功績の跡が大学にいくつか残っていることを私は嬉しく思います。